

身也。身具<sup>ス</sup>四根<sup>ニ</sup>。心徧<sup>ク</sup>緣<sup>ス</sup>四<sup>ヲ</sup>。故<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>心對<sup>シ</sup>身而爲<sup>ス</sup>涌沒<sup>ヲ</sup>云云。夫十方は依報なり、衆生は正報なり。依報は影のごとし、正報は體のごとし。身なくば影なし、正報なくば依報なし。又正報をば依報をもて此をつくる。眼根をば東方をもつてこれをつくる。舌<sup>ハ</sup>南方<sup>ハ</sup>鼻<sup>ハ</sup>西方<sup>ハ</sup>耳<sup>ハ</sup>北方<sup>ハ</sup>身<sup>ハ</sup>四方<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>中央<sup>等</sup>。これをもつてしんぬべし。かるがゆへに衆生の五根やぶ(破)れんとせば、四方中央を<sup>①</sup>どろう(駭動)べし。されば國土やぶれんとするしるし(兆)には、まづ山くづれ、草木か(枯)れ、江河つくるしるしあり。人の眼耳等驚<sup>ミヤウ</sup>そう(躁)すれば天變あり。人の心をうごかせば地動す。抑<sup>モレ</sup>何<sup>レ</sup>の經經にか六種動これなき。一切經を佛とかせ給<sup>ヒ</sup>しにみなこれあり。しかれども佛法華經をとかせ給はんとて六種震動ありしかば、衆もことにをどろき、彌勒菩薩も疑<sup>ヒ</sup>、文殊師利菩薩もこたへしは、諸經よりも瑞も大に久ありしかば、疑も大に決しがたかりしなり。故<sup>ニ</sup>妙樂云、何大乘經<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>集衆放光雨花動地<sup>ニ</sup>。但無生<sup>ニ</sup>於大疑<sup>等</sup>云云。此釋の心はいかなる經經にも、序は候へども此ほど大なるはなし、となり。されば天台大師云、世人<sup>おもへらく</sup>以蜘蛛掛<sup>レハ</sup>則喜來、鴉鵲鳴<sup>レハ</sup>則行人至<sup>ルト</sup>。小尙有<sup>リ</sup>徵大焉無瑞<sup>ラン</sup>。以<sup>テ</sup>近表<sup>ニ</sup>遠<sup>ニ</sup>等云云。夫一代四<sup>ノ</sup>十餘年が間なかりし大瑞を現じて、法華經の迹門をとかせ給<sup>ヒ</sup>ぬ。其上本門と申は又

爾前の經經の瑞に迹門を對するよりも大なる大瑞なり。大寶塔の地よりをどりでし、地涌千界大地よりならび出し大震動は、大風の大海を吹ば、大山のごとくなる大波の、あし(蘆)のは(葉)のごとくなる小船をひほ(追帆)につくがごとくなりしなり。されば序品の瑞をば彌勒文殊に問、涌出品の大瑞をば慈氏は佛に問たてまつる。これを妙樂釋云、迹事淺近 可寄文殊。本地難裁故唯託佛云。迹門のことは佛説給はざりしかども文殊ほほこれをしれり。本門の事は妙徳すこしもはからず。此大瑞は在世の事にて候。佛、神力品にいたて十神力を現ず。此は又さきの二瑞にはなるべくもなき神力也。序品の放光は東方萬八千土、神力品の大放光は十方世界。序品の地動は但三千界、神力品の大地動は諸佛世界 地皆六種震動。此の瑞も又かくのごとし。此神力品の大瑞は佛滅後正像二千年すぎて末法に入て、法華經の肝要のひろまらせ給べき大瑞なり。經文云、以佛滅度後能持是經故 諸佛皆歡喜現無量神力等云。又云、惡世末法時等云云。疑云、夫瑞は吉凶につけて或は一時二時、或は一日二日、或一年二年、或七年十二年か。如何二千餘年已後の瑞あるべきや。答云、周昭王の瑞は一千十五年に始めてあい(合)り。訖利季王の夢は二萬二千年に始めてあいぬ。豈二千

①をどりでし=涌出シ②一日二日=一月二月③の十(事ノ)④